

かたりべ 27

豊島区立郷土資料館だより

西仙寺のお地藏様

空襲をのがれて長野県坂城町の太英寺に集団疎開していた豊島区の時習小学校（当時は国民学校）六年の女子は、一九四五（昭和二〇）年四月、近くの西仙寺というお寺に引っこすことになりました。寮母として子どもたちの世話をされていた亀田喜代子さんは、はじめ西仙寺をみんなで訪ねた時の様子を次のように書かれています。

私より先に歩いて行った子供が「お姉さんここ

が入口みたいよ」と手招きをした。小走りに行ってみると急な一間半位のでこぼの坂道になっていて、左側に、お地藏様が並んでいた。登りながら、教えてみると、十三体あった。丁度そこで右側の石垣も終っており、右手にせまい庭があった。お寺が建っていた。

（当館発行『豊島の集団学童疎開資料集(1)』より）
左の絵は、この西仙寺学寮（くれたけ寮）の寮長をされていた東俊二先生が疎開中にスケッチされた西仙寺のお地藏様です。回想記にあるように、お寺に上がる坂道の脇にあったお地藏

様は、この寮のシンボリックなものでした。お使いなどに行って暗くなって帰る時お地藏様にふれながら、それを頼りに坂道を上がったそうです。

西仙寺へ引っこしたのは豊島区空襲がもっとも激しかった頃です。おだやかなお地藏様と猛火につつまれる東京と、こうしたなかで少女たちの新しくくらしがはじまりました。（青木）

このお地藏様は、位置はかわりましたが今も西仙寺に立っています。



特集 新館設立に向けてII

「突然ですが…この展示おもしろいですか？」

現在、郷土資料館では、来たる平成九年度開館予定の新館を、どのような理念のもとに、どのような施設にしていくなか（新館の基本構想）について、職員間で検討を重ねているところです。その際、利用者のみなさまにとつて親しみやすく、わかりやすい常設展示をいかに構成していくかが検討課題の一つとなっています。

そこで、利用者の方々が現在の郷土資料館の常設展示室・収蔵展示室を見学して、どのような感想をもたれているのか、率直なご意見を聞いてみるのも参考になるのではないかと、去る八月上旬から中旬にかけて、利用者のうち五人の方々にインタビューを試みました。まさに「突然で申し訳ありませんが…」ではじまる唐突なインタビューを行なった訳ですが、いずれの方々も快く応じて下さいました。

今回の特集は、名付けて「突然ですが…インタビュー」。「この展示おもしろいですか？」の顛末記です。

なお、インタビューの質問項目として以下の二点を掲げました。



導入展示「雑司谷鬼子母神」

- (1) 常設展示室・収蔵展示室を見学して、どのような印象をもちましたか？率直なご意見をお聞かせ下さい。
- (2) 現在の展示構成を新館建設の際にはどのように改善していったらよいか、ご意見をお聞かせ下さい。

以下、枠内の記述は、質問(1)(2)に対応するものです。

① 竹中康彦さん（公務員）に「突然ですが…」

- (1) 展示テーマがはっきりしているの、わかりやすい。ヤミ市、アトリエ村の復元模型はよくできていると思う。遺跡からの出土遺物などがないので、寂しい感じがする。近現代の展示をするならば、実際の生活が理解できるものを展示してもらいたい。
- (2) 展示ケースによって隔絶されていると資料が身近に感じられないので、ケースなしの展示方法を考えてもらいたい。ヤミ市についても、模型ではなく原寸大に復元し、その空間に入つて当時の様子が追体験できるものにしたらどうか。

一番はじめ（の犠牲者？）にお話を伺つた竹中さんは、偶然にも和歌山県立博物館の学芸員の方——なんと同業者——でした。和歌山県博も新館建設中ということで、東京に来たついでにいくつかの博物館を見学しているとのこと。

取材を忘れて情報交換に花が咲いてしまいました。展示ケースによって資料の「生」が失われてしまう場合があるなど、さすがにそのご指摘は的を得ていてたいへん勉強になりました。読者の方々も二年後には完成するという和歌山県博新館に是非お出かけ下さい。

② 雨谷久武さん（高校生）に「突然ですが…」

- (1) 人間の視覚に訴えかけるビジュアル的な展示方法なので見やすいし、わかりやすい。展示室に常時展示説明をしてくれる人がいれば、よりわかりやすいのではないか。
- (2) 豊島区の特徴を出すような展示方法を考えてほしい。例えば、ヤミ市のコーナーを設けるなどして、より突っ込んだ展示をしたらどうか。

学校の社会科の宿題のために、はじめて来館したという雨谷さんは、区内高松在住の方でした。こちらが用意した質問項目に気持ちよくポンポンと答えてくれて、しかも展示についてのコメントが高校生ばなれしたきわめて客観的なものだったので、驚くともないへん参考になりました。展示以外のお話では、現在、郷土

資料館の存在があまり知られていないようなので、新館を建てるときは案内板や誘導サインを設けるとか、館の存在をもっとアピールしたほうがよい、という貴重なご意見も伺うことができました。



池袋ヤミ市の模型を見学する雨谷さん

③ 森志麻子さん（自営業）に「突然ですが…」

- (1) 展示の内容は比較的わかりやすいが、もっとたくさん資料を展示してもよいのではないか。収蔵展示室の学童疎開の写真を見て、胸のつまる思いがした。
- (2) 今の若い人たちを引き付けるような展

示構成を考えてもらいたい。見学して身が引き締まるので、戦争を扱ったコーナーは是非設けてほしい。

郷土資料館の近く（区内池袋）に住んでいながら、仕事の関係でなかなか時間がとれずに、

はじめて来館できたという三森さんは、学童疎開のコーナーの資料を熱心に見学されました。「私は素人だから…」と、謙遜されましたが、戦争体験者の役割についてのお話はいへん参考になりました。

④ 小林真木さん（大学生）に「突然ですが…」

- (1) 展示資料がいろいろバラエティーに富んでおり楽しめる。収蔵展示室の説明はわかりやすいが、常設展示室の動線がわかりにくく、また園芸部分の壁面上部が見づらい。
- (2) ビデオ上映時間が30分というのは長すぎるので、せめて10分位のものを流してほしい。
- (2) 常設展示室と収蔵展示室とで展示方法を違える手法はおもしろいと思うので、新館でもぜひこの展示構成は継続してほしい。



近世の園芸コーナーを見学する小林さん

練馬区に在住の小林さんは、日本古代史を専攻する大学生でした。当館へは大学の学芸員課程のレポート作成のため、はじめて来館したこと。学芸員資格の取得を目指していることもあってか、それぞれのコーナーを熱心に見学されていました。その観察力は鋭く、逆にいろいろな質問をされていました。収蔵資料のこと、夏休み中の子ども対象の講座・教室のことなど。新館建設に向けて、展示構成のみならず建築面・事業面においても多くの課題が山積していることを痛感しました。

⑤野崎雅秀さん（大学生）に、突然ですが…

(1) ヤミ市、アトリエ村の模型に興味をもった。戦争に関する資料の中では、衣服類を展示してある例は多いが、軍部からの通達や戦地からの書簡が展示されているのは珍しい。また、展示解説シートの種類が多く、楽しめる。

(2) ヤミ市は「戦争の遺品」と思うので、引き続き扱ってもらいたい。アトリエ村も含めて、できれば模型としてではなく原寸大で復元してほしい。また、菓鴨ブリズンについても取り上げてほしい。

博物館や資料館に興味があり、いろいろな施設を時間を見つけては見学しているという野崎さんは、日本近代史を専攻する大学生でした（埼玉県蓮田市在住）。当館があることは前から知っていたそうですが、見学するのは初めてという野崎さんは、史跡案内図をはじめ、地図関係の展示パネルを中心に熱心に見学されました。戦争関係の展示については、こうした地域博物館には必要なものであり、夏の時期に企画するのは戦争体験を語り継ぎやすいという面からも非常によいのではないかとお褒めの言葉をいただきました。また、現在の都市化さ

れた景観が以前はどのような様子だったのか、明確に判明するような展示構成を心がけてほしいというご意見もいただきました。

* * *

以上、今回はアトランダムに利用者五名の方々に、突然ですが「インタビュー」をさせていただきますました。同じ展示内容であるにもかかわらず、各々がもたれる印象は微妙に異なっており、各自異なった課題意識のもとに見学されていることがわかりました。

一方共通していたのは、郷土資料館の展示についてかなりの関心と新館への期待が寄せられていることです。このことは、①我々職員が明確な理念のもとに新館建設に取り組まなければならないこと、②展示構成においても、当館側の展示意図が見学者の方々に伝えられるようなものにしていかなければならないことを示しているものと思います。

現在の展示をどのように新館に受け継ぎ、また改善していくか、具体的な作業については今後の大きな課題ですが、今回のインタビュー記事の内容を踏まえて、見学者にとってよりわかりやすい展示を考えていきたいと思います。

最後になりましたが、「突然ですが「インタビュー」に応じていただいた皆さま、ご協力ありがとうございました。

（秋山）

秋の特別展

写真にみる豊島六〇年のあゆみ展

開催せまる！

郷土資料館では、区制六〇周年特別展『写真にみる豊島六〇年のあゆみ展』開催に向けて、準備を進めています。今回の特別展開催に伴う準備の過程では、一般区民の方々にもご協力をいただき、多くの貴重な写真を提供していただきました。

ここでは、その中から何枚かの写真を紹介して、特別展の内容についてお知らせしたいと思います。

今回、区民の方々からお寄せいただいた写真のほとんどは、一九六〇年代から七〇年代にかけてのもですが、中には、大正時代に撮影されたものや、戦争中に撮影されたものなど、比較的古い写真もあり、どれも興味深いものばかりです。

とりわけ、今回多く提供されたのが、都電の写真です。現在都電は、荒川区の三ノ輪橋から北区・豊島区を通じて、新宿区早稲田を結ぶ荒川線一系統だけになってしまいましたが、一九六〇年代までは、都内を縦横にはしり、地域住民の足として活躍していました。



1968年の巣鴨駅付近（松井一彦氏提供）

このように、都電が一系統を残してすべて姿を消してしまったのは、なぜでしょう。一枚の写真からそんな疑問が生まれるかもしれません。また、その疑問の答えやヒントがひそんでいるかもしれません。



駒込の都電車庫（松井一彦氏提供）

今度の特別展では昔の写真を見て「なつかしいなあ」とか「昔とはずいぶん変わってしまった」ということだけではなく、なぜ変わったのか、何が景観を変えていったのか、ということなども考えながらご覧いただけるような展示にしたいと考えております。

また、今回、戦前・戦中の貴重な写真も、何か提供されました。これらは、「古い写真だから」とか「物資が乏しい頃の写真だから」ということだけで貴重なわけではありません。



戦場の兵士に送った写真（中森菊枝氏提供）

これらの写真の中には、被写体となった風景や人物の情報だけでなく、その背後にある生活環境や社会状況などを読み取ることができものがあ、そのような意味からも貴重な写真である、ということが出来るものもあります。

左の写真は、内地の家族が出征した兵士に送った子供たちの写真です。子供たちは、なぜこの様な表情をしているのでしょうか。また、なぜこの様な表情を取った写真を戦地へ送ったのでしょうか。考えさせられる一枚です。



大正時代の長崎町の雪景色（岩崎恵一氏提供）

今回の特別展は、一〇月一日から一二月三日までの二カ月間にわたって展示をいたします。また、郷土資料館での展示に先立って、一〇月一日から八日まで、区民センターの総合展示場でも展示を行いますので、ぜひともご覧ください。

なお、十一月五日・二九日、一二月六日の日曜日には、講演会や座談会を企画しております（八ページ参照）ので、多くの皆さまの来館をお待ちしております。

（伊藤）

郷土資料館 なんでもQ&A

Q 豊島区の歴史について、わかりやすく書かれた本を紹介してもらえませんか？

A 豊島区は誕生してから今年で六〇年を迎えますが、豊島区地域の歴史は先土器時代までさかのぼることが出来ます。豊島区発行の『豊島区史』（通史編四巻、資料編六巻）は、原始・古代から現在までの歩みを時代を追って詳細に記述したもので、あるテーマについて研究する場合に便利です。

気軽に豊島区の歴史がわかる一般向けの本としては、『豊島区の歴史』（林英夫著、名著出版、昭和五二年）があります。原始から戦後のヤミ市時代までの豊島区の歩みと区内九地域の史蹟を写真と地図で紹介したもので、付録には略年表、寺院・神社一覧、参考文献などが載っています。

このほか、区内の史蹟を紹介した『豊島風土記』（豊島区、昭和四六年）や、区内に伝わる民話、古老の話、祭祀行事などを収録した『豊島の民話』（豊島区、昭和四九年）、『豊島の歳時記』（豊島区、昭和五三年）などもあります。

ここに紹介した本は、郷土資料館または区内の図書館で閲覧できますので、ご利用下さい。

（石川）

連載 一点の資料から《その2》

あなたの家の香奠帳もチエック!

仏壇の引出しの中や古い戸棚の奥に、「香奠

(典)帳」と記された帳面が残されていることがある。これは、自分の先祖の葬式の時に香奠をどこの家からどのくらい貰ったかを記録したものである。この記録は、後日香奠をおくる立場となった時にそれなりの義理を果たすための参考となり、地域社会の中で暮らしていく際の必要帳簿であったため、私文書のなかでも比較的残りやすい性質のものといえる。

周知のように、香奠は人の死亡に際し親類・知人から喪家に対して悔みの意味を込めておくるものである。現在はたいてい金銭であるが、以前は米などをおくり、喪家への実質的な葬儀の協力が行なわれた。

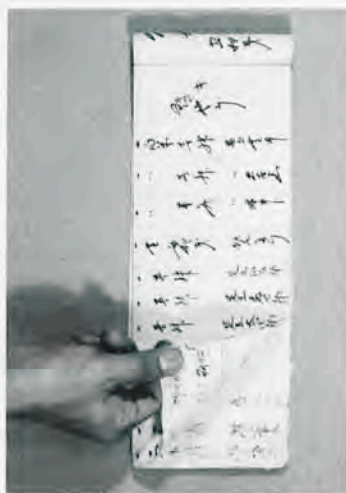
写真の史料は、南長崎の足立家に遺された明治三十七年(一九〇四)一月の「御香傳帳」である。内容をみていくと、この時足立家に香奠を寄せた家は合計五六軒。地域的には大塚・市ヶ谷・本郷・練馬など、近隣諸地域にわたっている。この五六軒のなかで金銭をおくったのが四八軒、白米一升が七軒、練香一箱が一軒である。また、白米をおくった七軒すべてが足立姓であることは、当時の葬儀における親戚付き合

いを考えるうえで興味深い点である。

さて、香奠帳の形態は一般に横長(帳)といわれるものである。この形態は商家に残される大福帳に代表されるように、金銭出納に関わる帳簿として多く用いられるものである。こうした横長(帳)に使われる料紙(≪ものを書くのに用いる紙のこと≫)の綴じ方は、ほとんどが折り目を下にするのに対して、香奠帳は折り目を上にしていく場合が多い(写真左参照)。「家」にとって喜ばしくない葬儀という出来事を料紙の折り方に象徴させ、それを「普通ではない方法」に変えることにより、「凶事」を示そうとしたのであろう。これは、香奠袋に入れる紙幣は裏返すというような、現在まで受け継がれている慣習に通じているものと思われる。もちろん料紙の折り方については、香奠帳のすべてに徹底していたわけではなく、折り目を下にする「普通の綴じ方」の香奠帳も多く残されている。しかし、このような文書作成上の特徴があるということを知っておくと、文書調査などで帳簿の綴じ目がはずされて襖の下張りなどにされている場合でも、「これは普通の折り方と逆だから香奠帳の一部である」と、即座に判断できる

から便利である。

文書資料を読む場合、われわれはその字面の解説に全力を注ぎ、内容理解が達成されるとそれだけで満足しがちであるが、文書形態や綴じ方の中にも先人たちが遺した多くの情報が込められ、現在に受け継がれていることがらがあることを忘れるべきではないであろう。(秋山)



足立平蔵家第2号文書

豊島区立郷土資料館からのご案内

★特別展記念事業開催のお知らせ

区制六〇周年記念特別展『写真にみる豊島六〇年のあゆみ展』の開催に伴い、左記のとおり記念事業を実施いたします。豊島区のことについてもっと詳しく知りたいかた、昔の豊島区の様子に興味をもっていらっしゃるかた、奮ってご参加下さい。

◎記念講演会(1)

(仮題) 豊島区今昔 (定員五〇名)

十一月四日(土) 午後二時から四時まで

◎記念講演会(2)

(仮題) 都市化と豊島区 (定員五〇名)

二月六日(日) 午後二時から四時まで

◎記念座談会

(仮題) 豊島を語る (定員五〇名)

二月一三日(日) 午後一時半から四時半まで

※会場はいずれも勤労福祉会館会議室。講師、および座談会出席者は現在交渉中。

参加をご希望の方は、一〇月二七日(火)以降、郷土資料館までお電話にてお申し込み下さい(申し込み先着順)。

★郷土資料館利用のお知らせ

開館時間 午前九時～午後四時三〇分

休館日 毎週月曜日、毎月第三日曜日、祝日、年末年始(十二月二十八日～一月四日)

入館料 無料

◎団体でご見学的な場合は、資料館職員による展示説明が必要な場合は、その旨を必ず事前にご連絡願います。

* * *

郷土資料館では、常設展・特別展のほか、歴史講座・地域史講座を開催しています。日程等につきましては、「広報としま」や「かたりべ」に随時掲載いたしますのでご参照願います。

また、受付カウンターでは『豊島区史』(全一三冊)をはじめ、今まで開催した『特別展図録』(一五冊)、『常設展図録』、『調査報告書』

(既刊第一～八集)、『豊島区地域地図』(既刊第一集～五集)、『収蔵資料目録』(既刊第一～五集)、『研究紀要』(既刊第一～六号)などを有償頒布しております。

頒布価格、頒布方法など詳しくは当館までお問い合わせ願います。

編集後記

秋の気配が感じられるようになった今日このごろ、夏の疲れはでていませんか？
特集第二弾のインタビュー企画は、いかがでしたでしょうか。インタビューを実際に行なってみて、見学者の方々の展示に対する「目」の鋭さと、郷土資料館新館に対する期待の大きさを痛感しました。今回のような「利用者から資料館がどのようにみられているのか」という問題については、いずれまた扱ってみたいと思います。

* * *

秋の特別展開催に向けて、現在急ピッチで準備を進めています。懐かしい池袋界隈の写真、あまり変わらない鬼子母神境内の写真などいろいろです。会期中に是非ご来館下さい。

かたりべ

・
No.27

・
1992年8月31日
発行

・
豊島区立郷土資料館

・
豊島区西池袋2-37-4

・
電話03-3980-2351